**寄　稿**

**第３回　アイリス・マードック国際学会に参加して**

**大槻　美春**

　 ２００６年９月１５,１６日、第３回アイリス・マードック国際学会が、ロンドンのキングストン大学で開催された。「道徳哲学と小説」がテーマで、５つの講演、４部門２つの分科会の計１６の分科会からなり、哲学理論としてのマードックの道徳哲学、作家マードックと哲学、宗教、哲学と小説、作品論、と英語圏だけではない世界中からマードック研究者、哲学者、宗教家が集まり、専門分野を超えた活発な学会であった。また、１７日には、グロスターロード駅からはじまるケンジントン公園へのアイリス・マードック・ウォーキングツアーがあった。

　第一日目、ピーター・コンラディ氏は、マードック文学の特質は笑いにあり、「マードックの笑い」の特徴はイギリス文学のシェイクスピアの悲喜劇の笑いの伝統の上にある。マードックは人間理解の困難さをコメディにしたが、そのコメディを読者はしだいに笑うことができなくなる、とマードックの笑いの感覚について講演した。

　続くシカゴ大学ウィリアム・シュウェイカー氏「想像の人たちの道徳のゆくえ：アイリス・マードックのヒューマニズムについて」と題された講演。人間の想像力による理解は必ずしも相手の現実をとらえるとは限らない。愛を認識する難しさをマードックは描く。マードックの人物たちは、目的もなく自己完結もしないが多くの自由を求め、自己の認識を越えようとし、他人の価値を知ろうとする。他人を知ることに目的はなく、人間存在そのもの（時間）である。存在を超える、性は運命であり、「善」に近づこうとするのは、人の目覚めの力であり、自己認識を超えようとするとき痛みを感じる。それは「美徳」である。自由、美徳、真理、神、善、のキーワードと共にサイードなど現代批評を視座に入れ、キリスト教的自由について、内なる自己と宇宙が幸福と結びついていることなど、マードックの後期作品を理解する上で特に、示唆にとむ講演だった。

　続いて、ブラウン大学ジャスティン・ブロッカー氏の「善の至高性を読む」の講演。ヴァトゲンシュタイン、フロム、ハクスレイ、リアリズムとリアリティ、道徳哲学と宗教、それぞれのマードック哲学との関係と用語の違いなど詳しく、哲学書の読みが作品においては議論となる場合があるなど具体的事例をあげての講演であった。

２日目の午前にはリチャード・トッド氏の「ジャクソンのジレンマ」についての講演が、午後にはベネディクト派の牧師であるマーク・パトリック氏の講演があった。パトリック氏の「アイリス・マードック、道徳、小説」は、その内容もさることながら、ユーモアと語り口は感嘆の一言、彼の人間的魅力が、次の日のウォーキングツアー参加者全員の共通話題であった。

　一日目夜のワインパーテイと３日目のキングストン大学アン・ロウ氏とボール大学シェリー・ボヴ氏の案内によるウォーキングツアーでは、いろいろな人と会話をすることができた。ウォーキングツアーでは、直接マードックに会ったことのある参加者からエピソードを聞き、マードックが亡くなるまで住んでいたフラットと道を挟んだ小さな公園、そして作品にあらわれるケンジントン公園のサーペンタイン、ラウンドポンド、ピーターパンなどなど、他の参加者と語りながらの散歩であった。一人でマードック作品の舞台を思いテムズ川河畔の散歩をした時とは違う格段の喜びであった。

　今回の参加は、本当に楽しかった。人を熱狂させるマードック作品の魅力とは何なのだろうか。学会には様々な背景と関心を持った人たちが集っていた。そこにはマードックが言う「他を敬う」雰囲気があり、「人間とは何か」、そして今マードックを読んだ私たちは何をするのか、と議論する学問の場があった。